

会長の挨拶 46 理論的意味論—その 2—（最終回）

ロータリー運動は、我々の日常の経済生活の背後に何等かの精神的基盤を求めているものであるということが漠然とわかるわけである。そしてその精神的基盤を倫理性という言葉で置き換えても良いと思われる。

我々人間は一人では生きて行けない。人間相互の協力を前提とする集団的社会生活がなければ、今日の物質的かつ文化的発展を遂げることはできなかつたであろう。

人間の理性を駆使する自由主義的活動を前提とする社会に住むようになり、それを世俗的に保障する団体として近代国民国家が誕生し、その下で人間は自由意志の命ずるままに自己の能力を十分に活用して人生を闊歩して生活しようとした。自然科学の研究と応用とは、この人間の活動に対してその効率の増大を保障した。商取引は社会活動の基盤となり、都市生活は人々の安楽な生活を保障するものとなった。

しかしその間に、人間が喪失したものは何か？それは人たるの心ではなかつたろうか。ロータリーが 20 世紀の初頭において説き始めた思想の理念とするところは、営利行為のみならず、ありとあらゆる人間の社会活動が永続的な繁栄を遂げるためには、人間の知性の練磨・能力の開発・勤勉・正直といった美德の他に、その行為を同時に他者の幸福のために配慮することではなければならないということ説いていると思われる。

（小堀憲助著『ロータリー思想の理論構造』より引用）

終わりに、

「始源は一切万事の大部分であり、且窮極である」とプラトンは「国家」二巻で説いているが如く、二十年前にロータリーの会員になって以来、ロータリーの起源の哲学を小堀憲助氏の書物にひたすら頼り学んだが、未だ悟れず、単なる一学徒に過ぎず、報告すらできない。唯恥じ入るのみである。しかし今後も諦めずに更に学んでいくつもりであります。

一年間、会員の方々の協力で会長の職務を無事終えることが出来、感謝に堪えません。有難う御座いました。